

武蔵野日曜聖書講筵

イエスの力

——マタイ伝第8章16～26節——

1980年1月13日

小池辰雄

福音書に親しむ 悪鬼を追い出す オイリュトミ 整体 宇宙の法則に従う キリストの中に
 すくい入れられた キリストに在れば大丈夫 本当の枕はキリストの腕 キリストと一つにな
 る 信仰の現実 死者は葬儀屋に任せよ 信仰すら私したらダメ 驚嘆驚倒して読む 霊法の
 世界に入る 一切の秘訣 天国への門 キリストには捨てられません 祈り

【マタイ8】

16 夕ゆうべになりて、人々、悪鬼あくきに憑つかれたる者をおおく御許みもとにつれ来りたれば、
 イエス言ことばにて霊を逐おいだし、病める者をごとごとく医いし給えり。17 これは
 預言者イザヤによりて『かれは自ら我らの疾患わづらひをうけ、我らの病やまいを負う』と
 云われし言の成就せん為なり。

18 さてイエス群衆の己めぐを環めぐれるを見て、ともに彼方の岸に往かんことを弟
 子たちに命じ給う。19 一人の学者きたりて言う『師よ何処いずしにゆき給うとも、
 我は従わん』20 イエス言いたもう『狐は穴あり、空の鳥は塹ねぐらあり、然れど人
 の子は枕する所なし』21 また弟子の一人いう『主よ、先ず往きて我が父を葬ほうむ
 ることを許したまえ』22 イエス言いたもう『我に従え、死にたる者にその死
 にたる者を葬らせよ』

23 かくて舟に乗り給えば、弟子たちも従う。24 視よ、海に大なる暴風あらしおこりて、
 舟、波に蔽おほわるるばかりなるに、イエスは眠り給う。25 弟子たち御許にゆき、
 起おこして言う『主よ、救いたまえ、我らは亡なぶ』26 彼らに言い給う『なにゆ
 え臆おそするか、信仰うすき者よ』すなわち起きて、風と海とを禁いめ給えば、大
 なる風なまとなりぬ。27 人々あやしみて言う『こは如何いかなる人ぞ、風も海も従う
 とは』

●福音書に親しむ

福音書に帰りますと、なにか故里に帰ったような気がする。それほど、私は福音書が身
 についていると言いますか、非常に身近なわけです。何と云っても、聖書の全66巻の中で
 どこを選ぶかと言えば、結局、福音書なんです。ということは、キリスト自身の言葉、行為



全存在がここにぶちまけてありますから。何と言つても、キリストに來なければ、どうにもなりませんから。そういう意味で、福音書は、皆さんも本当に親しんでください。聖書はどこを読んでもいいですけども、必ず福音書に帰るといことが大事です。

●悪鬼を追い出す

特にマタイ伝8章というのは始めからキリストの奇蹟的なことが非常に載っているところですよ。

16 夕ゆうぐべになりて、人々、悪鬼あくきに憑つかれたる者をおおく御許みもとにつれ来きたりたれば、イエス言ことばにて靈を逐おいだし、病める者ことごとくを医いし給たまへり。17 これは預言者イザヤによりて『かれは自ら我らの疾患わづらひをうけ、我らの病やまいを負う』と云われし言の成就せん為なり。

「…せん為なり」という言い方はヘブライ語的な言い方です。むしろ、

「このようにして成就したのである」

と、目的を結果のように意味をとった方がいくらいです。英語でもドイツ語でも、「ツ」という目的が時々、結果に訳されますね。それと同じようなわけです。

「悪鬼」——或は悪霊、サタン——は「ダイモニオン」という字ですが、これは何も悪鬼ばかりに限らないで、靈的な存在です。

「ソクラテスはダイモニオンの導きによつていた」

という。ちよつと、キリストと似たようなところがあるんですが、そういう意味の場合もあるわけです。要するに、

「靈にはいろいろあるから、よく靈をわきまえろ」

というようなことを、パウロもコリント前書の12章や14章で言ってますが。「靈」と言つたつて、普通は分からない。今では、

「精神状態がおかしい」

と、医学的に人間の精神状態の表現でもつて言つて、「靈」ということはあまり言わないけれども、悪霊の働きというのは確かにある。私も前に伝道していて、悪鬼が働いてきて苦しんでいる人のその靈を追い出した、そういう体験も持っております。医者はどうにもならない。ところが、その靈が出てしまうと、気持が平常になるし、病が軽くなり、治るということが起きる。肉体的な欠陥がそういった靈の働きによるということが大いにあるわけです。

キリストはもうはつきり、神の靈の方ですから、悪しき靈がすぐ分かる。そして、悪しき靈に囚われた者を、

言ことばにて靈を逐おいだし、病める者ことごとくを医いし給たまへり。

という。この場合の「靈」は「プニユーマタ」「諸々の靈」という字が使つてある。



マルコ伝の方では、

「³²夕となり、日いりてのち人々すべての病ある者・悪鬼に憑かれたる者をイエスに連れ来り、³³全町こぞりて門に集まる。³⁴イエスさまざまの病を患う多くの人をいやし、多くの悪鬼を逐いだし之に物言うことを免し給わず、悪鬼イエスを知るに因りてなり。」(マルコ1:32～34)

と書いてある。ルカ伝にも似たようなことが書いてある。

「40日のいる時さまざまの病を患う者をもつ人、みな之をイエスに連れ来れば、一々その上に手を置いて医し給う。⁴¹悪鬼もまた多くの人より出で叫びつつ言う『なんじは神の子なり』之を責めて物言うことを免し給わず、悪鬼そのキリストなるを知るに因りてなり。」(ルカ4:40～41)

悪鬼がキリストであることが分かつて叫ぶものだから、「物言うことを免し給わず」と。「自分をあらわすな」

というわけです。イエスは自分が「キリスト」であることを、「メシヤ」であることを、或る時機まではふせておきたかった。ところが、悪鬼というのは霊的な存在だから、普通の人には分からないけれども——むしろ、普通の人にはキリストの本質が分からない——悪鬼というのは霊だから、神の霊であるキリストが分かるものですから、それで、キリストだということを言おうとすると、それを「今は言うな」と。おもしろいですね。

●オイリュトミ

ドイツ語で「オイリュトミ」(Eurythmie)というのがある。もともとギリシヤ語ですが、「オイ」というのは「正しい、美わしい、健やかな」という意味です。「リュトモス」は「リズム」という字です。美わしい調子、健やかな調子ということ。シュタイナー(ルドルフ・シュタイナー Rudolf Steiner 1861～1925)という方が非常に宇宙の神秘的な調べというものを聴いて、「オイリュトミ」ということを言った。ひとつの治療法といえますかね、あるいは治療というよりもむしろ、芸術的な人間の生き方です。

宇宙にはハーモニーがある。宇宙的なハーモニー、法則に乗ることができるが、本当に人間の魂やまた身体の在り方にいかに大事であるか。それが本当の芸術的な在り方だと言う。「オイリュトミ」という在り方から、それによって身体の運動——ダンスです——ダンスもそういうダンスがおのずからできてくる。それから、それによって人間の在り方の——それがゆがんでいると病気になる——その病気が治る。あるいは、教育も、そういった間違った教育の仕方から、本当の教育の仕方ができるというようなことを言っている。

要するに、「ダルマ」です。宇宙の法なんです。ある意味において、私たちが言っている霊法なんだ。非常に似ている。

人間の身体の運動を「A」(アー)、「E」(エー)、「I」(イー)、「O」(オー)、「U」(ウー)



の母音の姿に表す。なかなか面白い。それから、いろいろ運動にかかっていつて、ダンスになる。やはり、この母音というもの——ことにこの「A」（アー）は一番基本ですけれども——母音が非常に中心になっている。子音でなくて母音です。「母音」という字はおもしろいね、「母の音」と書くから。やはり、そういう言い方になるんだね。

● 整体

また、「整体」ということをやっている人がある。ある女の方で、整体を非常に深く会得しているひとのところへ私は訪ねて、私の身体を見てもらった。そしたら、脊椎を観る。やっぱり、脊椎というのが人間の一番大事なところなんだね。神経と非常に関係がある。私の脊椎をずっと見て、手で触る。着物の上からでもわかるんです。

「二箇所ちよつと横つちよになつてゐる。けれども、先生の脊椎の骨は全部、呼吸している。こういう人は珍しい。大抵、どこか詰まつてしまつて窒息している」

と言つたよ。「呼吸している」と妙なことを言つた。私はキリストの中に呼吸しているものだから、そこから来ているらしいね、やつぱり。ちよつと一つ歪ゆがんでいる。全然これが歪まない人はほとんどないらしい。ちよつと歪ゆがんでいる。この歪みはどこから来ているかは、その人はすぐ分かるんだね。その歪みをまだ治さないうちに、私の右の膝関節の裏側をその人が指を当てて——そこは痛いんです——そこを按摩する。熱くなつてくるね。そして、

「はいっ、治りました」

というわけだ。そうすると、こつちが治つてしまつてゐる。そこへ来ている。そして、膝関節の裏側が痛くなくなつてしまつた。

そういうように、実際的には、脊椎が非常に大事だそうです。やはり、姿勢は非常に大事なことです。この頃は姿勢の悪いやつがたくさんいる。これは大変よくない。私たちは、小さい時から姿勢のことは非常にやかましく学校で言われたものです。姿勢をよくするということが、真つ直ぐに立つ。また、坐るときにもね。

この真つ直ぐの姿がこの「I」（イー）なんです。我々が直立している姿が「I」。この直立が少し曲がつたり、猫背になつてみたり、そういうことにならないように。歩くときに、よく曲がつている人がいますね。あれはいかん。

● 宇宙の法則に従う

いかにいわゆる薬というものが却つて害が多いか。もう、薬の公害現象がたくさん起きている。日本は薬が多すぎる。むしろ、やはり、それが整体医学であろうと、さっきの「オイリュトミ」であろうと、要するに、宇宙の法則に従うというような角度において、共通しているものがある。

私たちにとつては今度は、宇宙を創造している神さまの——それはまた宇宙に通じてい



て、神の栄光が現れているんだけれども——キリストはまた、その神の法則に、靈法に完全に従っているひとでしょ。靈法を行じているひとでしょ。だから、このキリストという、靈法の具体的な存在に自分を本当に投げかけていけば、もう、健康法なんて言わなくても、おのずからそうやって来ているわけです。具体的にそういうようなことをなさっていらつしやる方の言うことも、もちろん参考にしていい。参考にして結構だけれども、しかし、一番根本のところは、我々はこの福音でもって受けとっているんです。それを、いろんな無理をすることおかしなことになる。

野口晴哉はるちか(昭和初期の整体術師)という方は、もう故人の方ですが、そのひとの本の中にこういう言葉がある。治療も、いわゆる治療をするための治療ではないということが書いてある。人間がいかに連帯的であるかという文のなかにも、

「二人の苦しむは百人の苦しむなり。一人の悩みは万人のものなり。宇宙の悩みまた一人の悩みなり」

なんて、この人は実にもしろいことを言っている。結局、自然と自分が一つになることをね、

「自分なく、自然なく、息一つになることなり」

と。おもしろいね。自分もなければ、自然もないと。この大自然と、息——気です——一つになると。ということは、自然と自分が一気に、一つの気に、すっかり溶けてしまう。いわゆる我がなくなつて、いわゆる自然もなくなつてしまつて、そこにあるものは気だけだという。似たようなことを言っているんだ。気だとか、息だとか。要するに、この呼吸ですね。息、霊、氣、風はみんな一つの言葉ですよ、ギリシヤ語もヘブライ語も。だから、

「神は靈なれば、靈にて生まるる者も、風がはずこより来て、はずこへ行くか
を知らざるが如し」

とキリストが言われた。みんな、相通するものがある。

だから、「病氣」というでしょ。「氣」が病んでいる。これは素晴らしい言葉です。病氣というのは、もともと気が病んでいる。気が本当の気になれば、本質的には、病はどこかに行つてしまう。もう、心配事がくると必ず、その心配事に支配されると、必ず肉体に作用してきます。ご飯がおいしくない。そうでしょ。気が本当のところに来ていれば楽しいでしょ。楽しければ、粗食してもそれは身になる。いくら御馳走を食べても、心配したら、ちつとも身にならない。逆に害になる。だから、ただカロリーが問題じゃない。問題はみんな、「氣」にかかっている。

●キリストの中にすくい入れられた

「救われた」というのは、

「本当にキリストの中に入った」



ということですが。「救われる」という言葉が、何かただ作用的なことかと思うと、そうではない。救われた現象はいろいろでしょうけれども。「救われた」ということは、

「キリストの中にすくい入れられた」

ということ。「掬う」というのは、何かオタマジヤクシをすくうような具合に。我々はキリストの中に掬われてしまった。「中に入る」ことが、「すくい」なんです。おもしろいね。そうすると、非常に楽になってしまふ、気が。即の世界に入ってしまうから。

「信仰」なんていう言葉が逆に非常に妨げになっている。躓きになっているんです。信仰というひとつの精神状態を、何か集中しようとする。こないだの坊さんの話を聞いていても、ちよつとそのこだわりがあるね。だから、「信仰」なんて言わないで、交わる「信交」か、あるいは信じ入る「信入」だ。

今、キリストが悪鬼を追いだして病を癒すということが書いてあつた。こないだ、ある人が耳鳴りがしてしょうがない。お医者さんに行つて薬を飲んで、一時的にちよつとよくなつても、また鳴つてしょうがないと言ふ。私はその話を聞いたから、その人に、

「ちよつと、そこに坐つてなさい」

と言つて、その耳鳴りがする耳に私は30秒くらい手をおいた。もう来ているからね、上から。

「はいっ、治りました」

と。治つてしまった。びつくりしてしまった。

「すつかり、止まりました」

と。もうそれから一週間たつても、どうでもない。30秒ですよ。これはキリストのこの気が入つてしまったから。

「あなたは私に感謝なさるけれども、ダメだ。神さまに感謝してください。私を通

して力が働いたら、キリストですから」

と。そういうことですよ。それは何でもないんです。私が何か不思議な力を自分で持っているなんて思つたら、大間違い。私は何もない。ただ、主さまの中に自分を入れてしまうからね。入れなければダメだよ、キリストの中に自分を。向こう側の主さまではない。我がうちなるキリストの霊です。そうしたらば、グーツと働くから。

だから、キリストと一如の世界に自分を投げ入れる。一如になるように自分を投げ入れる。

「南無」

というのは、本当に祈入すること、祈り入ることだから。その秘訣を受けとつてしまったら。こんなことを普通の教会では牧師さんが言つてくれない。皆さんはもう、福音の一番の神髄のところを私は語っているんですからね、そのつもりで本当に受けとってくださいよ。

私たちは空気から離れることはできないじゃないですか。吸っているではないですか。そのように、我々の霊がキリストを呼吸することになる。それはもう、どうしたつて、深く祈らなければいかん。祈り入らなくてはいかん。そのためには、福音書をよく読んで、キ



リストの現実の中に自分を入れることです。観念ではないですから。だから、
「聖書はドラマだ」

と言っている。今も二千年前も同じこと。それを、

「二千年前はこうだったけれども」

なんてやっているから、いつまでたっても始まらない。

「良き治療家は宇宙と共に息し、共に動いて、その息一つなり」

なんてね、おもしろいよ、この人は。こういう境地に入っていれば、これは本ものです。

●キリストに在れば大丈夫

そういうわけで、悪霊は、キリストは言葉で追いだしてしまふ。キリストは、或る時は手をお使いになるし、或る時は言葉だけで追いだす。自在であります。悪鬼に憑かれた人は、悪鬼が出ていけば、病は治ってしまふ。

悪鬼でなくても、あまりお母さんが子供を溺愛してしまったものだから、その子供に死んだお母さんの霊が入ってしまう場合がある。そうすると、その子供はあまり成長しない。何か少しおかしくなる。N君の奥さんが病院にいらつしゃった時に、隣の病室に二人の女の人が寝っていて、一人の人が夜中になると妙な声を発する。私はその部屋へ行つて、その人に

「あなたは、どういう生い立ちか話してください」

と聞いたら、

「13歳のときに、非常に私を愛してくれたお母さんが亡くなった」

という。お母さんの霊が入っているなと私は思ったから、

「その声はお母さんの声ですよ」

と。それから、その人に手を按いて

「お母さん、お母さん、ご安心なさい。この人はキリストの助けによって行きますから、どうかご安心ください」

と言って、御名によってお母さんの霊を天界に送ってしまった。そうしたら、その翌日から、もうそういう声は出なくなつて、妙な痰が出て身体がどんどん軽くなつて行つたという話だ。それは悪鬼でなくなつて、そういうことがある。

悪霊に呪われた話もいろいろ前にあつたですよ。私はそれをみんな体験しました。キリストに在れば、恐いものはない。ちつとも恐くない。幽霊が出たら、

「どうしましたか?」

と言ってやりなさい。そして、慰めてあげなさいよ。何か困っているから出てくるんだから。これは皆さんはだんだんそういうことを体験して行かないとね。

キリストに在れば大丈夫です。パウロが



「キリストに在る」

と言うことは、決して形容詞ではない。本当に

「キリストの中に在る」

ことなんです。いいですね。これが、いわゆる信仰の世界ではダメです。パウロのそういう言葉が本当に響いてない。私は無教会にいたから、そのことはよく分かっている。一つの観念として、「に在る」ということを思っているだけの話です。思っているだけではダメなんだ、現にいななくては。

● 本当の枕はキリストの腕

18 さてイエス群衆の己を環めぐれるを見て、ともに彼方の岸に往かんことを弟

子たちに命じ給う。19 一人の学者きたりて言う『師よ何処いずこにゆき給うとも、

我は従わん』20 イエス言いたもう『狐は穴あり、空の鳥は疇ねぐらあり、然れど人

の子は枕する所なし』

有名な言葉ですね。「人の子」というのはご自分のこと。「人の子」という言い方はダニエル書に出てくる、「メシヤ」の一つの隠れた言い方です。イエスは無宿者、宿無し。浪人だね。ところが、キリストは草を枕とし、石を枕とし、木の根っこを枕にし、何でも枕にする。舟板を枕にすることが後で出て来る。どこでも眠れる人なんです。

「枕する所なし」

というのは逆に、

「至る所を枕とする」

ということ。我々はこうやって、家を持って寝ているね。けれども、本当にキリストの中に、懐の中に寝ていなければ、本当は枕しているのではない。

「我々はありがたいな、枕しているな」

なんて思っても、どっこい、本当に枕してはいない。相対的な枕は持っているでしょう。けれども、本当の枕はキリストの腕ですから。キリストの懐ですから。キリストの懐に入って寝る。

いろいろなことがあるよ。けれども、寝るときは、

「主さま、一切をお任せします」

と言つて、心配事も何もすつ飛ばしてしまふ。問題も何もすつ飛ばしてしまふ。そうすれば、本当は、ヒルティが『眠られぬ夜のために』なんていう本を書かなくなつてすんだんだ。もちろん、ヒルティは本当にキリストの中に眠ることを言っているけれども。だから、眠るのはキリストの中に眠らなければダメだよ。そういうことが本当の眠りなんです。不眠症というのは、神経衰弱ではなくて、信仰衰弱です。

私はいつどこでも眠れる。電車の中でもどこでも。何時から何時まで眠らなくては、



なんてこともない。そういうことで、非常に楽なんです。

そして、祈れば目が醒める。よし、今日は何時まで仕事をやろうと思って、少し祈って、それからやる。眠くなったら、10分でも15分でも寝てしまおう。自在ですよ。それでなければ、本当の仕事はできないもの。

●キリストと一つになる

私は今日は題に「イエスの力」と書いたが、キリストの中に入っただけの祈りの力は本当に強い。相手が抵抗していたら、相手はぶつ倒れるよ。いわゆる呪いではない。呪うことはいかん。それは悪霊だ。悪霊よりかキリストの霊の方が強い。私は悪霊の呪いにかかった人をキリストの霊で本当に助けたからね。

「先生、だんだん抜けていきます」

と言う。呪った方がぶつ倒れて、

「あいつを守っている霊は強いから」

と、それから今度は呪わなくなった。私が強いのではない。キリストが強いんです。だから、皆さん、なにも恐いことはない。祈りが力を持っているのではない。キリストの中に祈り入った、その祈りによって来ているキリストの力が凄いんです。キリストは神に祈り入って、神の力で生きていた。神と一つになるのだから。

「我を見し者は父を見しなり」

と言う。一つになる。

いいですか。今日は新しい方がいらつしやるけれども、なにも私は摩訶不思議なことを言っているのではない。これが本当の現実なんです。恋人同士がそうでしょう。

「我が彼女か、彼女が我が」

というような、それくらいの仲にならなければ、本当の愛ではないよな。また、相手を救い上げてしまおう。

●信仰の現実

けれども、人間相互のそんな愛は——それも悪くはないけれども——「神・キリスト・我」の三重の内接円とならなければ本ものではない。これが本当の現実、これが信仰の現実です。これはなぜ入れるかというと、十字架で入ったんだ。キリストの十字架が自我というやつをすつ飛ばしてください。まあ、十字架がわからなくてもいいよ。まず入ってしまったらいい。そうすると今度は、十字架が本当に分かってくるから。本当は、この十字架という贖罪によって、我という自我がすつ飛んで、無我とされている。

「でも、なかなか無我になれません」



と誰でも言うよ。その通りです。ところが、

「無我という事態を賜っているので、無我でないものがあつたつていいよ。どん底には自我でないものをやったから、無我でない我というやつがあつたつて心配するな」

とキリストは言うんだ。これが信仰の現実です。これ（賜った無我）が強いから、いくらひっくり返つたつて、また起き上がってくる。そして、これが入ると今度は、これが聖霊の事態になる。この無というのが今度は、御霊の現実に変わるわけです。だから、この中に入ると、十字架は私たちを無我にして、聖霊はそこに無限無量なるものとしてくださるということ。

無限無量なる質ですよ。量的に無限無量ではない。質が無限無量的なものである。「聖霊」は、「義」と言おうが、「愛」と言おうが、何と言おうがいい。いろんなものがこの中に渾然こんぜんとしているから。私は「愛の神学」となぜ言わないで、「無の神学」と言うかというところ、「無」というのが凄いものだから、私は「無」と言わざるを得ないんです。今年は『無の神学』（著作集第三巻、1982年5月刊）をじっくり書きますから。

●死者は葬儀屋に任せよ

20 イエス言いたもう『狐は穴あり、空の鳥は罫ねぐらあり、然れど人の子は枕する所なし』

「人の子は枕するところなし」という。私たちは枕するところがあるような顔をしているけれども、本当は枕していない。

「キリストの中に枕しているときに本当に枕している」

ということを今日ははっきり申し上げておきます。キリストは至るところを神の懐にしていた。至るところ神の懐です。

21 また弟子の一人いう『主よ、先ず往きて我が父を葬ほうむることを許したまえ』

お父さんが死んでしまった。「父が亡くなったので、その葬式に行かせてくれ」と。普通の人なら、行かせますよ。ところが、キリストは、「我に従え」と言われた。

22 イエス言いたもう『我に従え、死にたる者にその死にたる者を葬らせよ』

これは訳がまちがえた。「死にたる者にその死にたる者を葬らせよ」の原語は、

「ミッター（葬儀屋）にミッター（死者）を任せよ」

という言葉なんです。「ミッター」というのは葬儀屋で、「ミッター」というのは死者ということ。

「死者は葬儀屋に任せよ。お前はこつちへ来い」

と、何も無理を言ったのではない。「死者をして死者を葬らせよ」とは一体どういうことかと、いろいろ学者が深遠な解釈をつけているよ。キリストはそんなことは仰らない。実にやさ



しいことを仰った。

もともと、これはアラミ語というヘブライ語の一つの方言ですけれども、みんな母音を書かないで子音だけなものだから、ギリシア語に直すときに間違えてしまった。子音だけだと同じ字なんだ。ところが、母音を変えると、「葬儀屋」と「死者」という別な言葉になってしまう。だから、今、ヘブライ語の新聞を読もうとすると、子音だけしかないから、ヘブライ語を知らなければ絶対に読めない。これは音で読めないんです。やつかいな言葉だよ、ヘブライ語というのは。それで、似た言葉がたくさんある。三つの子音の順列組み合わせでできているんだから。それからいろいろな前置詞が付いたり、後置詞が付いたりしている。ヘブライ語は難しいですよ。

「そうか、死者は葬儀屋に任せておけ。私に従って伝道しようというならば、お前はこつちへ来い。お前は人を漁るすなごひとだ」

と。キリストは非人情みたくないなことを仰ったけれども、

「それだけの覚悟がいるぞ」ということです。

キリストに従うとなつたならば、第二義的なことにはこだわらなということですよ。もちろん、我々の現実の生活では、いろんなことをしなければなりません。けれども、何をしても、今度は本当にそれがキリストに仕えていることであり、キリストの栄光あかしを証するものである。何をしていても、そういうことです。

私は大学で教えていたときは教授だとか、中学・高校では校長ですよ。けれども、本式に伝道したいんだよな。何か自分の気持で分裂していた。けれども、ある時から、「もういい。学校で教えることも本当の意味では伝道だ」

と思うようになった。もちろん、伝道をそこでぶちまけるわけではないけれども、そういう気持になったら楽になりました。けれども今度は本当に辞めたら、これはまた本当にもっと楽になる。一本だからね、今度は。そうしたら、やはり、力が違つてきました。

●信仰すら私したらダメ

23 かくて舟に乗り給えば、弟子たちも従う。24 視よ、海に大なる暴風あらしおこりて、舟、波に蔽おほわるるばかりなるに、イエスは眠り給う。25 弟子たち御許にゆき、起こして言う『主よ、救いたまえ、我らは亡な』』

舟と一緒に亡びてしまおうと。

26 彼らに言い給う『なにゆえ臆するか、信仰うすき者よ』すなわち起きて、風と海とを禁め給えば、大なる風なまとなりぬ。27 人々あやしみて言う『こは如何いかなる人ぞ、風も海も従うとは』』

まあ、大変なことが簡単に書いてある。もちろん、これは私は『無者キリスト』(著作集第一巻)



に書きました。よく読んでください。時々、私の手紙だと思って、私の本を読んでくださいね。あの第一巻の口絵のところにはレンブラントの名画（暴風雨のガリラヤ湖上のイエス、1633年作）を載せました。嵐の中でキリストは眠っている。キリストの頭には光がさしている。弟子たちはうろたえている。これも、さつきから言っているとおり、舟板を枕にしているのは、舟板を神の懐としてキリストは眠っている。大変なひとだ。もう本当にケタが違う。弟子どもはうろたえて、キリストを起こしたらば、

「何だ。信仰うすき者よ！」

と言う。キリストが「信仰うすき者よ」なんて仰るものだから、

「それでは、信仰が厚くならなければいかん」

と、今度は一生懸命で力^{りき}むよな。それではダメだよ。信仰というのは、1から99まではダメです、100でなければ。

「まあ、信仰が薄いかな。そうだな、今は30くらいだな。今度は60くらいになろう」

なんて、だんだん信仰を厚くしようと思う。普通はみんなそう考えている。

「まだ、私は信仰が足りないんでね」

なんて。それはダメなんだ。むしろ、私は

「信仰に絶しろ。ゼロになれ。自分の信仰なんてものをあてにするな」

と言う。普通のクリスチャンはみんな、

「私はまだ信仰が足りない」

なんて、だんだん足りるようにしようと思っている。

「信仰すら私したらダメですよ」

と私は言う。信仰とは何ですか。自分の信念ではないんです、信仰というのは。

「キリストはもの凄いなあ。神・キリストは絶対的なものだ。キリストは100だ」

と100%に叫んでいるのが、これが信仰なんだ。そして、

「私は0だ。私の3だの、60だの、90だの、そんなのは問題ではない」

と。「100」とは無量大（∞）のことです。

●驚嘆驚倒して読む

神さまは、キリストは無量大なものです。キリスト自身がゼロになっていたんだから。

「なぜ、我を善しと言うか。私は何も教えられない。何もできない。ちつとも

善くはない」

と、キリストはそう言っている。ヨハネ伝をよく読んでください。神さまだけを「100」に、無量大にしているんだ。そして、神の懐の中に入ってしまったら、キリスト自身が無量大になったから、無量大なものがそこに展開して来た。これが、マタイ・マルコ・ルカ・ヨハネの福音書です。この事態が展開しているのがこの福音書というんです。だから、福



音書に来て、驚嘆驚倒して読まなければダメなんです。

「そんなことがあるか？」

なんて言っているうちは、いつまでたってもダメです。いいですね。

「参りました!」

と言って降参しなさい。「参りました(降参)」ということ、自分がゼロということ。「参りました」と言うと、今度はこの世界に入れる。何かしらんが、キリストの中に入ってしまった。何かしらんが、力が出てくる。楽になる。

若い人は「ゼロ」なんて聞くと、何か情けないようなことに思うが、そうではない。蛍光灯にしろ、ランプにしろ、電気にしる、ガスにしる、太陽の光にかなうかと言うんだ。太陽の光と比べたら、これはゼロに等しいではないか。我々が持っているものなんかはゼロに等しいんだ、神さまに比べたら。そんなものをなぜ問題にしているか。そんなことをしないで、自分その中に入ってしまう。無限無量な質がこのところに働きます。同じ60であっても、違った60になってしまう。一人びとりは、人間は、相対的特殊的存在だから、それぞれの限界というものはあります。しかし、その限界はありながら、その限界に無限界的なものが入ってくる。量が問題ではない。質が問題になってくる。この質が凄いことになる。学生諸君なんか、勉強の質が違ってくる。

● 靈法の世界に入る

キリストは湖の上を渡ってきた。そうしたら、変化か化け物かと思って、舟の中の弟子たちが恐れた。キリストは、

「なぜ、こわがるか。私だよ」

と。ペテロは、

「先生でしたか。じゃ、行かせてください」

「ああ、来なさい」

と。ペテロは歩いて行ったら、二、三步、歩いたけれども、波と風とを恐れたら沈みかかった。ゲエテが

「これは本当に素晴らしい。信仰の奥義を語っている」

と言っている。そして、ペテロを掴まえて舟の中に入れてやった。キリストというのは大変なひとです。「水の上を渡った」と言っても物理的に渡っているのではない。物理の法則をもうひとつ超えている。靈法の世界に入っている。今ここでもって、波を鎮めてしまったでしょ。これは物理法則をもうひとつ上の靈法でもって鎮めてしまった。

日蓮がやりました。第一級の坊さんはそれと似たことをやっています。親鸞なんかも、

「泊めてくれ」

と言ったのに、その家の婆さんに断られて、



「枕する所なし」

というわけで、軒下の石を枕にして、親鸞は眠ったという。そうしたら、さすがに婆さんも少し気がとがめて、夜中になって、そつと雨戸をすかして見たら、親鸞の身に光がさしていた。びっくりした。大変な坊さんだと。そして、あやまった。立ちつくして動けなくなってしまうんだよな。そういう世界です。

ありがたいことに、私たちが本当にキリストの中に平伏し、その中に入ると、何かしらんが、そういうことになってくる。そういう無即無限無量の事態です。これが信仰という。それだから、もう心配が要らなくなってしまうた。

「南無阿弥陀仏」

「南無妙法蓮華経」

「南無キリスト」

これくらい素晴らしい言葉はない。そうすると、その中に入ってしまうんだ。普通、「南無妙法蓮華経」だの、「南無阿弥陀仏」なんて言っているのは、空念仏が多い。あんなに何遍も言う必要はない。自分自身が南無阿弥陀仏、南無妙法蓮華経そのものとならなければダメなんです。「南無キリスト」そのものとなる。

普通の牧師さんはきつと、こんな乱暴な講義をする人はないでしょうね。乱暴ではない。本当なんだ。私は仏教の人たちでも、それが本ものなら本当に尊敬します。ウソものはダメだよ。

キリストの「鎮まれ」というこの言は普通の言葉ではない。

「わが言は靈なり、生命なり」

という。風と海が静まってしまった。

「波題目」というね。日蓮が佐渡へ渡るときに時化した。日蓮は竿で波の上に「南無妙法蓮華経」と書いたら、波が静まって来たという。本当にそうです。「南無妙法蓮華経！」と称えれば、龍ノ口で斬ろうとしたやつがぶつ倒れてしまう。私はああいう話を聞くと、うれしくてたまらんね。本当にそうだと。奇蹟でも何でもない。靈法が働いているんです。

「生命の御霊の法」

とパウロが言った。

●一切の秘訣

そういうことです。福音書はその現実をまだ語り尽くせないで困っているんですよ。日曜日にやって来て、一緒に聖書の中に入って、祈っていれば、今までの心配事はみんな飛んでいってしまうよ。病んでいる人も治ってしまうよ。神に、キリストに信頼すると言うならば、それだけの気持をもって出かけて来なくて。また、出かけていらっしやっていると信じていますが。そうでなくて、



「ああだ、こごうだ」

とやっていたら、いつまでたつても始まらない。

これがパウロがピリピ書で言った

「一切の秘訣」

なんです。パウロはどんな事態に対しても絶対に行き詰まらない。このキリストを持って
いるから。パウロの書簡を読んでごらん。

「ああ、凄いなあ。やつぱり、キリストが全部、働いているな」
ということになる。まあ、大変なひとです、キリストというひとは。

その大変さがどういう内容であるか。これをみんな受けとっていないで、ただ

「神の子だから」

なんてやっている。ところが、

「キリストは地上では自分を何もしなかった」

という大変なことなんです。

「神が彼において自在に現れた」

という大変な事実なんです。そうしたらもう、福音書はやめられない。註解書なんか要ら
ない。もうこれをグーツと読んでいけば。私の書いたものなんか、

「ああ、そうだ、そうだ」

と、あなた方は楽に読める。私の書いたものは難しいとか何とか、いろんなことを言っ
ているよ。昔の人間だから、字は少し難しい漢字なんかを使っているかもしれないけれど、
中身はちつとも難しくくない。そんなことで難しいなんて言われたら本当は困るんだ。いい
んだよ、そんな字なんか読めなくなつて。読めなくなつて分かってしまうんだ。

「ああ、そうです、そうです」

と。

●天国への門

今日初めて来られた方もいらつしやるようですけれども、「キリスト教」というのは教え
ではないんですよ。今、私が話したような事態、ドラマなんです。どうぞ、福音書のそう
いうドラマの中に自分を投げ入れて――サマリヤの女とキリストが話していたら、自分が
サマリヤの女になつてその現場にいて――100%にキリストを受けとつてくださいますよ、しが
みついてください。何だかしらないけれども、楽になつてしまうから。

「幸福なるかな、心の貧しき者。天国はその人のものなり」(マタイ5:3)

という。

「さあ、困つたな。なかなか、私は心が貧しくなれません」

とみんな思うんだよな。私も一番先にあの言葉に躓いた。「心の貧しい」とは「霊の貧しい」



ということ。「霊の貧しい」とはどういうことかと。キリストは教えているのではない。自分のことを言っているんだ。キリストは霊が貧しかった。

「自分を何ものともしない」

ということが「霊が貧しい」ということです。そうしたら、

「天国はその人のものなり」

と。キリストにとって「天国」は神さまです。

「神さまはその人のものなり」

ということ。神とキリストは一つになってしまった。私はその真似はできない。だから、キリストの中に入っていく。

「恵福さいわいなるかな、わが十字架によって、自我がすつ飛ばされて、霊が貧しくなった

お前。天国即ち聖霊の我がお前の中にあるぞ」

と、こう響いてきたから、私はもうそれでもってピシヤツとあの言葉が身につけてしまった。そうしたら、後はもう、キリストの言葉が楽に読めるようになってしまったと、こういう話です。あれは天国への門ですよ。

「恵福さいわいなるかな、霊の貧しき者。天国はその人のものなり」

これ一つを本当に掴つかまえたなら、もうあとは楽に読める。これは、

「我れキリストと共に十字架せられたり、もはや我れ生くるにあらず、キリス

トわが内に在りて生きたもうなり」

という、パウロのガラテヤ書2章20節と内容が同じなんだ。そんなことを言ったやつは世界中にいませんよ、そんな註解をするやつは。誰が何と言おうと、私ははつきりと御霊の力でもってそう言えるんです。

●キリストには捨てられません

今日は「イエスの力」と題しました。キリストが悪鬼を追い出したり、病を癒したりしたことは、みんな中心はその人の魂のことなんです。魂が本当の角度に入られると、肉体の病も何もみんな治ってしまう。いわゆる「神癒」なんていう、病を癒すための癒してはない。普通、盲人が目が見えるようになったり、跛者あしなえが立つようになったり、聾者ごりやくが耳が聞こえるようになる、その人たちはそれを非常に喜んでいる。それでは御利益ごりやく信仰になる。喜ぶのは結構だよ。喜んでいいけれども、今度は、喜んだら、キリストの中に入らなければダメなんです。

だから、彼らの信仰がまたあとでダメになってしまう。私のところで救われた人も、現象げんしょうだけに囚とらわれていて、あとでダメになる。現象を通して本体の世界に入らなければ。感謝は結構なんだが、感謝したらば、その感謝の奥の世界に入って行かなくては。そして、今度は、本当の感謝をしてくださいよ。



「私はキリストをつかまえた。キリストの中に入りました」と。そうしたら、もう大丈夫。ところが、福音書のご連中も、使徒行伝の使徒たちにいる癒された連中も、本当にその世界に入らなかつたから、みんな本当の信仰からこぼれてしまう。

この集会に来て、出たり入ったり、いろいろしているよ。本当のものを掴まない人はみんなそういうことになる。人間小池なんかを相手にしているから。人間小池というこの破れ器を通して何が現れているか。そいつを掴まえたなら、

「もう、先生、何がどうなつても、一緒に行きますよ」

というのが本当の友人だ。私が躓いたり転んだりしたら、かついでくださいよ。我々の友情というものは、そういうキリスト中心でもって動いていく友情です。私は誰に捨てられても、絶対にキリストには捨てられません。私にキリストが贖ってくださったこの贖いは絶対的なものですから。

「自分が信じている」

なんていう、そんな生易しいものではないんです。

イエスの力というのはみな神の力ですから。イエスを通して神の力が現れている。だから、サタンと一騎打するときにも、絶対にキリストは自分の霊力なんて思わない。

「神を拜せよ。神を試みるな。神に従え、拜せよ。サタンよ、退け！」

と。サタンというやつは自分で大いに力があると思つてやっている霊的な存在だ。それは力があるよ、悪い作用をする力を持つている。けれども、神さまの善玉にはとてもかなわない。ルターも

「小さな言葉がサタンを倒す」

と言う。「小さな言葉」というのは、

「十字架！」

とか

「キリスト！」

とかいう一つの言葉を称えようと、サタンは恐くなって逃げていく、ということなんです。「南無妙法蓮華経」、「南無阿弥陀仏」がこの「小さな言葉」なんです。また、これが人を救う。悪いやつは倒す。狼もなついてしまう、アッシジのフランチェスコには。

福音がいかに力であるかということ、私は今度の『詩篇珠玉集』（著作集第四巻、1980年1月刊）の第84篇のところにも書いてあります。

「聖霊、なんじらの上に臨むとき、汝ら能力をうけん」（使徒行伝1:8）

「ステパノは恩恵と能力とに満ち、民の中にて大いなる不思議と徴とを行えり。」

云々」（使徒行伝6:8）

もう、あちらこちらに出ています。



「神の国は言ことばにあらず、能力ちからにあればなり」(コリント前書4・20)
 「我等この宝を」

キリストの福音という宝を、あるいはキリストという宝を

土の器もに有てり。これ優れて大なる能力ちからの我らより出でずして、神より出づることの顕あらわれたためなり」(コリント後書4・7)

たくさん有りますが、要するにこれは恵みの力です。暴力ではない。愛の力です。これが一番強い。

「愛は一切に勝つ」

というのは、そういう力を持っている。救い上げる力ですから。相手を済度する救いの力、恵みの力なんです。これを我々は遠慮なくいただくかなくはいかん。ということは、いつもキリストと一つになることです。

● 祈り

祈ります。悪鬼が来ればこれを追いだし、本当に人間を深く憐れみ、まことの救いへと福音書において自在に御業をお現し給いましたが、しかし、十字架につく前は、それらのことがまた躓きともなり、なかなか本当の信仰に入れない民衆でした。しかし、あなたが十字架につけられ、復活のあなたにでつくわし、躓いた弟子たちも初めて目が醒めました。まだ本ものではなかった。

祈って聖霊をいただいた時に初めて本当に目が醒め、あなたの御力にあずかり、使徒ペテロがそのことを最もはつきりと現してくれました。福音書の使徒ペテロは躓いたり転んだり、ガタガタでした。しかし、聖霊をいただいた使徒行伝のペテロは本当にあなたにつける者でした。パウロも、ヨハネもみな同じく、このようにして御霊におけるあなたの御力がいかに驚くべきものかを知りました。

私たちもまた、この使徒的信仰の中によいよ同質的に入って行き、いろいろなことを学んだり体験したりしますが、そのことを通して、あなたの本当の根源の事態を現してくださるように願ひ奉ります。……また、やがて『詩篇珠玉集』が出ますが、そこに本当の福音が自在に語られております。どうぞこれを通して、これを読む人たちの中に、新しき音信として、ことに福音を知らない人たちがこれに目覚めることができますように、ご活用くださらんことを願ひ奉ります。

また、今日はいろいろ、病や何かで来られなかった兄弟姉妹たちもありますが、どうか、彼らをそれぞれの所において深く顧み、彼らが聖書を開き、あなたの中に飛び込むことができますように願ひ奉ります。

今、尽くしませんが、心からの感謝と讚美、御名により捧げ奉る。アーメン。

